シリーズ成田市60年⑨

大栄町の歩み

現在の大栄地区

伊能地区にあった初代町役場庁舎

大栄町(現成田市大栄地区)は、中央部を東関東自動車道が走り、国道51号も東西に横断するなど、交通アクセスに恵まれた場所です。今回は大栄町の歴史を紹介します。

大栄町の誕生

昭和30年4月、県北部の北総台地に位置する大須賀村と昭栄村の2村が合併して新たな町が生まれました。町の名前はそれぞれの村の名前から1文字ずつとって「大栄町」。当時の人口は1万1、954人でした。翌月町長選挙が行われ、初代町長に佐藤重郎氏が就任しました。

待望の町役場庁舎が昭和31年、伊能地区に建てられると、町政が本格的にスタートしました。

なお、この庁舎は老朽化に加え、手狭になったため、昭和46年6月、国道51号に面した松子城跡の一隅に新たな庁舎が完成しました。旧町役場跡には現在、大栄地域福祉センターが建てられています。

川上小と桜田小が創設

合併した大栄町では、教育環境の整備にも取り組みました。

合併当時、町内には前林、津富浦、大須賀の3つの小学校と、奈土、村田、桜田、新田の4つの分校がありました。このうち前林・津富浦小学校の一部と新田分校が統合され、昭和32年4月、大栄町立第三小学校(現川上小)が開校しました。また、同月、大須賀小学校の分校だった桜田分校が独立して桜田小学校が創立されました。

残る2分校は、児童数の減少により、昭和49年までに廃止されました。

中学校は合併当時、大須賀・昭栄中学校の2校でした。生徒数の減少などから2校は統合され、昭和58年に大栄中学校が開校しました。

発展する交通網と物流拠点

昭和41年に決定した、成田空港の建設は、町の一部が空港に隣接する大栄町にも大きな影響を与えました。

昭和43年に国道51号が舗装され、昭和60年に東関東自動車道の成田―大栄間が開通しました。

空港へはもちろん、都心や鹿島港へのアクセスに恵まれた立地条件を生かして、昭和59年から吉岡

Narita Chronicle
「大栄町の歩み」

昭和30年	4月	大須賀村・昭栄村が合併して大栄町が誕生
昭和31年	2月	役場新庁舎が完成
昭和36年		伊能歌舞伎が県指定無形民俗文化財に指定
昭和45年	11月	町の木がサザンカに決定
昭和58年	4月	大栄中学校が開校
昭和60年	2月	東関東自動車道大栄インターが開通
昭和61年	4月	大栄B&G海洋センターがオープン
	12月	大栄工業団地が完成
平成 3年	12月	大栄町コミュニティプラザホールがオープン
平成 6年	1月	福祉センターがオープン
平成11年	11月	伊能歌舞伎が復活

昭和33年当時の大須賀中学校

桜田小学校
第1回卒業生

合併に伴い開町式が挙行

皇太子夫妻(当時)が伊能幼稚園を訪問(昭和48年)

地区で大栄工業団地の造成工事が進められ、昭和62年3月に終了し分譲が開始されました。

また、空と陸を結ぶ物流の拠点となるべく、堀籠・村田地区に大栄物流団地(現成田新産業パーク)が建設されました。

サツマイモと米のブランドを確立

大栄町では合併当初から、土地改良と畑作への転換が推し進められました。特に昭和40年代半ばから、サツマイモの生産量が飛躍的に増え、昭和58年には収穫量が県内1位になりました。

また、大栄町産のサツマイモは、その味の良さで全国に知られるようになりました。中でも有名なのは、何年にもわたる試行錯誤の末に作り出された「大栄愛娘(まなむすめ)」。名前には、品種改良に励む父を応援しながら収穫を見ずに亡くなった娘への思いが込められています。

一方で、高齢化や後継者不足などの理由で、農業を続けられなくなる人も増えていきました。そんな中、伊能地区にある耕作放棄された水田を再生させて米を作ろうと、平成15年に地元有志が研究会を設立しました。食味の良い米作りにこだわり、栽培基準を厳しく管理し、平成16年からブランド米として販売を開始しました。その名も「伊能歌舞伎米」。平成11年に34年ぶりに復活した伊能歌舞伎にちなみ、地域の誇りと願いを込めて名付けられました。

復活した伊能歌舞伎

大須賀大神の例大祭の奉納芝居として約300年の歴史を持つ伊能歌舞伎は、娯楽の多様化などに伴い、昭和40年の公演を最後に上演が途絶えてしまいました。しかし、町民の熱意と努力により、平成11年に34年ぶりに復活。現在も定期的に公演が行われ、ことしも11月9日㈰に大栄公民館プラザホールで開催されます。

地域住民が熱演